

第5学年 理科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「物のとけ方」

2 単元の目標

物が水に溶けても全体の重さは変わらず、溶ける量には限度があり、水量・温度・物の種類で異なることを理解し、実物の観察・実験と記録を扱う技能を身に付ける。「物が水にとける量を増やすには、何を変えればよいだろうか」を追究し、根拠を基に考えを表す。自分の記録を見直し、分からないことを確かめながら学習に取り組む。(A(1))

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①物が水に溶けても全体の重さは変わらず、溶ける量には限度があり、水量・温度・物の種類で異なることを理解している。 ②実物の観察・実験と記録について、対象、条件や時期、調べて分かったことを区別して記録している。	①「物が水にとける量を増やすには、何を変えればよいだろうか」について予想を基に調べる方法を考え、変える条件や資料の選び方の理由を表現している。	①物のとけ方の学習で生じた疑問について、自分の記録や友達の考えを基に調べ方や説明を見直し、解決しようとしている。

4 指導上の考察

(1) 単元について

「物のとけ方」は、第5学年のA(1)を手掛かりに、自然の事物・現象を調べる単元である。中心となる理解は、物が水に溶けても全体の重さは変わらず、溶ける量には限度があり、水量・温度・物の種類で異なることである。名称を覚えて答えるだけでなく、「物が水にとける量を増やすには、何を変えればよいだろうか」に答えるために何を見て比べればよいかが授業の焦点になる。

本案では、溶ける様子と前後の重さを調べるところから始め、物の種類ごとに溶ける量を調べる活動を通して考えを確かめる。結論だけを先に提示すると、観察や資料が答え探しになるため、予想と理由を残してから調べる。単元末には結果から適切な取り出し方を説明することで、学んだ言葉と根拠が結び付いているかを確かめる。

学校の既習と実態は資料だけでは決められない。前の記録を見て、説明に必要な言葉や道具の扱いを確かめる。扱ったことのない内容を既習として書き込まず、必要な確認を導入に加える。

(2) 児童について

(学級の子どもの様子を先生が書く)

(3) 指導について

本時では「物が水にとける量を増やすには、何を変えればよいだろうか」を中心の問いに据える。水量を変える実験と温度を変える実験を分け、溶かす物の種類や量の測り方をそろえる。溶け残りを確かめ、食塩と別の物質の結果を表に並べる。冷却や蒸発で取り出せた物と溶かす前の物を比較する。

児童の最初の考えを消して正答に直させるのではなく、どの記録で考えが変わったかが分かるよう書き足させる。見えなくなったから重さが減るという考えには容器を含めた前後の重さを比べる。温めればどの物も同じように多く溶けると一般化せず、物質ごとの測定結果を使う

資料を読むことや書くことが負担になる児童には、比較する箇所を絞った図、読み上げ、指差しや口頭説明を用意する。説明の代筆は児童に内容を確認してから行い、文字量で理解を判断しない。早く説明できた児童には、同じ説明が当てはまらない記録がないかを探させる。

安全と扱いの留意点は次のとおり。水溶液は飲まない。加熱は保護眼鏡を用い教師の管理下で行う。熱い容器を触らず、薬品の廃棄は学校の規程に従う

5 指導と評価の計画（全14時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1～3	○溶ける様子と前後の重さを調べる。	知①・知②（記録・活動の観察）
第2次	4～6	○溶け残りから溶ける量の限度を考える。	知①・知②（記録・活動の観察）
第3次	7～8	○水量と温度を別々に変える計画を立てる。	知①・知②（記録・活動の観察）
第4次	9～10	○物の種類ごとに溶ける量を調べる。	知①・知②（記録・活動の観察）
第5次	11～12 （本時を含む）	○冷却や蒸発で溶けた物を取り出す。 ○水量を変える実験と温度を変える実験を分け、溶かす物の種類や量の測り方をそろえる。溶け残りを確かめ、食塩と別の物質の結果を表に並べる。冷却や蒸発で取り出せた物と溶かす前の物を比較する。	思①（個人の説明・記録）
第6次	13～14	○結果から適切な取り出し方を説明する。	態①（記録の見直し・振り返り）

6 本時の指導（11／14（配当案））

（１）本時の目標

「物が水にとける量を増やすには、何を変えればよいだろうか」について予想を基に調べる方法を考え、変える条件や資料の選び方の理由を表現することができる。

（２）学習過程

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
導入 （ 分）	○前時までの記録から「溶ける様子と前後の重さを調べる」ときの疑問を取り出す。 ○「物が水にとける量を増やすには、何を変えればよいだろうか」 【めあて】調べた事実を使い、自分の考えと理由を説明しよう。 ○一人で予想と理由を書き、調べたい点を確認する。 〈予想される児童の反応〉 ・物が水に溶けても全体の重さは変わらず、溶ける量には限度があり、水量・温度・物の種類で異なるのか確かめたい。 ・前の記録と比べると違いが見つかりそう。	・答えを先に示さず、児童がどの記録を根拠にしたかを尋ねる。 ・水溶液は飲まない。加熱は保護眼鏡を用い教師の管理下で行う。熱い容器を触らず、薬品の廃棄は学校の規程に従う
展開 （ 分）	○前時までの観察・調査の記録を使う。以下に示す調べ方を振り返り、本時は問いに関係する記録を比較する。追加の実験・調査は方法を計画し、次時に確かめる。 ○水量を変える実験と温度を変える実験を分け、溶かす物の種類や量の測り方をそろえる。溶け残りを確かめ、食塩と別の物質の結果を表に並べる。冷却や蒸発で取り出せた物と溶かす前の物を比較する。 ○「どの観察結果から、そう考えましたか」 ○自分の説明を相手に示し、根拠が同じか違うかを比較する。 ○説明できない記録があれば条件や資料の読み方を確かめ直す。 ○予想を確かめる方法を考え、変える条件とそろえる条件、または資料を選ぶ理由を表す。 〈予想される児童の反応〉 ・同じだと思ったが、比べるところをそろえると違いがある。 ・この記録だけではまだ決められない。 ・物の種類ごとに溶ける量を調べることで、理由を確かめたい。	・見えなくなったから重さが減るという考えには容器を含めた前後の重さを比べる。温めればどの物も同じように多く溶けると一般化せず、物質ごとの測定結果を使う ・結果に合わない意見も記録へ戻る材料として取り上げ、発言した児童を責めない。 ・比較が難しい児童には記録の対応する箇所を指し示し、まず事実を口頭で説明させる。 ・本時に単元全体の実験や調査をやり直さない。比較する記録を準備し、方法を確認する必要がある部分だけを実物で示す。 ◎思① 「物が水にとける量を増やすには、何を変えればよいだろうか」について予想を基に調べる方法を考え、変える条件や資料の選び方の理由を表現している。（個人の記録と説明。交流前後の変更理由を含めて見る。）

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
まとめ （ 分）	○本時の問いへの答えを、根拠となる観察結果とともに書く。 【まとめ】物が水に溶けても全体の重さは変わらず、溶ける量には限度があり、水量・温度・物の種類で異なる。 ○最初の考えから変わったことと、まだ調べたいことを記録する。 〈予想される児童の反応〉 ・考えが変わったのは、記録を比べたときに違いを見付けたから。 ・まだ確かめていない条件が残った。	・まとめは得られた記録の範囲に限定する。予定どおりの結果が出なければ条件と方法を見直し、実測結果を作り替えない。 ・振り返りで分かった支援の必要な点は次時の活動に反映する。 ・本時の重点は「予想を確かめる方法を考え、変える条件とそろえる条件、または資料を選ぶ理由を表す。」であり、知識の結論だけで思考の評価を決めない。 ◎知①（まとめの説明）／態①（記録を見直す過程。発言回数や文章量だけで判断しない。）

（３）板書計画

上段に「物のとけ方」と本時の問い「物が水にとける量を増やすには、何を変えればよいだろうか」。左側に予想とその理由、中央に実際に調べた事実の記録、右側に事実から考えた説明を置く。中央は条件・時期・対象が分かる見出しにし、比較する記録を同じ高さに並べる。物の種類ごとに溶ける量を調べる際に用いた記録を残し、根拠と説明を線で結ぶ。下段には確かめられたことと、まだ残る問いを分けて置く。発言の多い子の説明だけで仕上げず、個人の記録の違いを残す。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」（@mie_ai_katsuyo）
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
 みえ先生ラボ

